日语古典文法

徐 曙 编著

上海交通大学出版社

日语古典文法

徐曙 编著

上海交通大学出版社

内 容 提 要

本书是为高校日语专业本科生及研究生学习、研究日语古典语法而编写的教学工具书。内容包括日语古文的假名表记、句法、词法、修辞法等四个方面，结合大量实例对日语古典文法的规则、运用作了简明扼要，由浅入深的解析，条理清晰，实例丰富并标明出处，例句引用来源广，且全部配有现代口语译文，对于加深理解日语古典语法及实例有着举一反三、触类旁通之效。本书后半部分还专门编著了“汉文训读”章节，将我国古文中的名作佳篇及唐诗宋词中的经典诗句作为日译实例以促进学习者掌握日语古典语法的要领。不失为日语学习者及日语从教者的良师益友。

图书在版编目(CIP)数据

日语古典文法 / 徐曙编著.—上海：上海交通大学出版社，2007

ISBN 978-7-313-04649-9

Ⅰ. 日… Ⅱ. 徐… Ⅲ. 日语－语法－古代－高等学校－教材 Ⅳ.H364

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2006)第 155626 号

日 语 古 典 文 法

徐 曙 编著

上海交通大学出版社出版发行

（上海市番禺路 877 号 邮政编码 200030）

电话：64071208 出版人：韩建民

太仓市印刷厂有限公司印刷 全国新华书店经销

开本：787mm×960mm 1/16 印张：18.25 字数：393 千字

2007 年 7 月第 1 版 2007 年 7 月第 1 次印刷

印数：1—3 050

ISBN 978-7-313-04649-9/H·635 定价：24.00 元

版权所有 侵权必究

前　言

むかし男ありけり。その男、身を要(えう)なきものに思ひなして、京(きやう)にはあらじ、東(あづま)の方(かた)に住むべき国求めに、とて行(ゆ)きけり。もとより友とする人ひとりふたりして行きけり。道知れる人もなくて、まどひ行(い)きけり。三河(みかは)の国八橋(やつはし)といふ所にいたりぬ。……

ムカシ[ヒトリノ]男ガアッタ。ソノ男ハ、ワガ身ヲツマラナイ者ニ思イコンデ、京ニハ居ルマイ、東国ノ方ニ住ムニフサワシイ国ヲ求メニ、[行コウ]、トイッテ出カケタ。以前カラ友ダチトスル人ヒトリフタリデ行ッタ。道ヲ知ッテイル人モナクテ、サマヨイナガラ行ッタ。三河ノ国八橋トイウ所ニ到着シタ。……

上述文章分别是日本平安时代的作品《伊势物语》中的一节及其现代日语的译文。对照一下可以发现，两段文章共同的用词很多，文章结构也相似，但一般日语学习者却无法很顺畅地读懂前面的那段古文。日语古文中有着现在已经不再使用的词汇，还有与现代日语语义不同的词汇。尤其是助动词、助词与现代日语区别很大，用言的变化形式也不同于现代日语。因此，阅读古典作品，需要利用辞典等来了解不明单词的词义，同时还必须了解、掌握古典作品中用言的变化及助动词、助词的用法。本书就是为满足日语学习者及日语教学者的此种需求而编著的。希望日语古典语法的学习能成为读者对日语本身进行重新审视的契机。

“日语古典语法”是日语专业的专业课程，在日语专业八级考试及报考日语专业研究生的考试中，日语古典语法也为必考内容。

古文语法乃现代语法之基础，语法是构成文章骨架的基本理论。文章的正确理解及表达是要依靠语法来保证的。对于日语专业的学生以及从事日语教学工作的教师来说，要真正掌握好日语、了解并理解日本文学、日本文化等专业知识，日语古典语法及古典作品的学习就是必不可少的。

一般来说，语法学习有研究性学习与实践性学习两种。语法的研究性学习是专家学者的学习，而实践性学习则是用语法或借助语法来学习，是学习语法的运用方法或规则。在日语古典语法的教学中，应该对学生强调的是实践性学习。学

生在阅读理解日语古文时所需要的语法知识应该通过实践性学习来掌握。学生需要了解古文语法的基本规则，但不必花很大精力对古文语法进行专业性的学习。古文语法的教学不能让学习者因为学习内容过于理论而失去兴趣。因此，本书在编著过程中，始终贯彻了实践性学习这一原则，尽量挑选日语古典作品中比较精彩有趣的文章及诗歌作为解释说明古文语法的实例，目的是想让学习者在了解日语古典语法规则的同时，欣赏到日本古典作品的精彩有趣。考虑到学习者在以后考研或从事翻译工作时，难免会遇到我国古典精品唐诗宋词及成语谚语的日译，本书在后半部分专门编著了“汉文训读”章节，将我国古文中的名作佳篇及唐诗宋词中的经典诗句作为日译的实例，促进学生掌握日语古典语法的要领。

本书每一章节后面都配有练习实例，这些练习的完成结果也是检验学习者日语古典语法基本素养和文化底蕴的一个参数。

本书在立项及编著过程中，得到上海交通大学出版社韩正之总编及金英爱编辑的诸多支持与鼓励，两位还针对我国日语教学现状为本书的定位提供了颇有见地的宝贵意见；作者的友人、日本国大阪大学前教授宫崎和夫先生和同济大学日语系吴侃教授对本书进行了仔细的审阅和指导，在此一并表示由衷谢意。

徐 曙

2007 年 3 月 28 日

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

作者简介

徐 曙

1955 年 2 月生于上海。

1978 年毕业于吉林大学外文系日语专业，同年开始从事日语教学与研究工作。

1989 年 4 月至 1990 年 5 月受邀赴日本法政大学任客座研究员。

1991 年 6 月至 1993 年 5 月任日本共同通信社上海支局长代理。

2001 年 9 月至 2002 年 5 月受邀赴日本国际交流基金日语国际中心进行教材开发合作项目。

2005 年 4 月至 2006 年 3 月受三菱集团资助赴日本成蹊大学攻读 MBA 学位。获工商管理硕士学位。

现任上海对外贸易学院日语专业教授。教育部高教司大学日语四六级考试命题组成员。

至今为止在国内外学术刊物上发表《日本人の言語意識》、《认知学与语言学》、《外语测试的有效性和可靠性》、《现代日语中的“若者言葉”特征分析》等学术论文数十篇。主编及参编教材《日语表达技能》、《新大学日语-听力与会话 1/2》(国家级“十五”规划教材)、《日语专业八级考试全攻略》、《高级日语 1-4 册》等。

目　次

第一章　古文の基礎知識…… 1
第一節　古文の仮名遣い…… 2
第二節　古文の言葉の単位 …… 7
第三節　古文の文の構造…… 10
第二章　品詞と品詞分類…… 19
第一節　主部となる自立語　名詞…… 21
第二節　修飾部となる自立語　連体詞・副詞…… 25
第三節　接続部となる自立語　接続詞…… 34
第四節　独立部となる自立語　感動詞…… 42
第五節　述部となる自立語　動詞・形容詞・形容動詞…… 46
第六節　付属語　助動詞・助詞…… 70
第七節　活用のある付属語　助動詞…… 71
1. 助動詞の分類 …… 71
2. 時の助動詞（き，けり，つ，ぬ，たり，り） …… 74
3. 推量の助動詞（む（むず），べし，らむ，けむ，らし，めり，まし）
…… 85
4. 打消の助動詞（ず） …… 105
5. 打消推量の助動詞（じ，まじ） …… 107
6. 伝聞・推定の助動詞（なり） …… 113
7. 断定の助動詞　（なり，たり） …… 117
8. 自発・可能・受身・尊敬の助動詞（る，らる） …… 121
9. 使役・尊敬の助動詞（す，さす，しむ） …… 127
10. 願望の助動詞（たし，まほし，ごとし） …… 134
11. 比況の助動詞…… 136

第八節　活用のない付属語　助詞…… 138
1. 助動詞の分類…… 139
2. 格助詞(が，の，を，に，へ，と，より，から，にて，して)…… 142
3. 接続助詞(ば，とも，と，ども，が，に，を，て，して，で，つつ，ながら，ものの，ものを，ものから，ものゆゑ)…… 150
4. 副助詞(だに，すら，さへ，のみ，ばかり，など，まで，し)…… 158
5. 係助詞(ぞ，なむ（なん)，こそ，や，やは，か，かは，は，も)…… 162
6. 終助詞(な，そ，ばや，なむ（なん)，てしが（てしか)，てしがな（てしかな)，にしが（にしか)，にしがな（にしかな)，もがな，がな，もが，な，かな，か，は，も，かし)…… 170
7. 間投助詞(や，よ，を)…… 174
第三章　敬語表現…… 177
第一節　尊敬語…… 184
第二節　謙譲語…… 191
第三節　丁寧語…… 195
第四章　修辞法…… 198
第五章　漢文…… 206
第一節　漢文訓点のきまり…… 208
第二節　書き下し文の作り方…… 214
第三節　返読文字…… 217
第四節　再読文字…… 220
第五節　漢文のしくみ、熟語の成り立ち…… 224
第六節　助字のいろいろ…… 227
第七節　よく出る句形（1）否定形・禁止形…… 231
第八節　よく出る句形（2）使役形・受身形…… 235
第九節　よく出る句形（3）疑問形・反語形…… 238
第十節　漢文読解に役立つ漢字…… 241

附録　日本古典文学略年表…… 248
練習問題解答…… 255

主要参考資料…… 283

第一章　古文の基礎知識

古典の文学が現代の文学に影響を及ぼし、古典のことばが現代語の基になっていることは、特に日本に限ったことではなく、世界の文学、言語がすべてそれぞれの歴史の上に成り立っていることは言うまでもない。現代人として、昔の人のものの考え方やとらえ方、また、文化や生活を受け継いでいくことは大変重要なことである。しかしながら、ここで障害となるのが、言葉の問題である。古典に使われていることば（文語）は、現在使われていることば（口語）とは少し違っているために、つい、古典に対してしりごみをしがちである。このことばの障害も、必要最小限の古典文法の知識があれば、簡単に取り除くことができる。たとえば、「秋は来ぬ」という文がある。どのような読み方をして、どのような意味なのか、これは、「来」という動詞と「ぬ」という助動詞についてのちょっとした知識があれば、簡単に理解することができる。

口語には口語の決まりがあるように、文語にも文語の決まり、すなわち古典文法がある。それは、一つの体系をもっている。例えば、品詞というものは、古典に用いられる単語を、いろいろな観点を設定して、分類・整理したものである。この分類によって、個々のことばのはたらきを体系的に理解することができる。また、例えば、品詞の一つである助動詞も、その意味に着目して、分類・整理することができる。一つ一つの助動詞の意味や用法をバラバラに覚えるよりも、それぞれの語の基本的な意味や用法を比較・関連させて学習すると、理解がしやすくなる。

ことばは、それを使う人のもののとらえ方の反映である。古典文法は、昔の人のもののとらえ方の体系であるとも言える。古典文法を知ることは、そのようなことばを生み出した昔の人の思考の体系を知ることでもある。例えば、口語の場合と違って、文語では、推量の助動詞が非常に発達している。学者によれば、これは、ものごとを断定的に述べるよりも、遠回しにやわらかく述べることを第一とする考え方が、平安時代にはあったからだと説明されている。古典文法の知識をただ丸暗記するのではなく、ことばの決まりの背後にある、昔の人のもののとらえ方を想像したり考えてみたりするようにすると、文法の学習が楽しくなる。

第一節　古文の仮名遣い

古文をはじめて学ぶとき、どういうところが読みにくいかというと、古典の言葉に慣れていないので読みにくいということを別にすれば、まず、そのかなづかいが現代文のかなづかいと違うという点が考えられる。

古文は古典かなづかい（**歴史的かなづかい**）で書いてあるから、まずその読み方になれることが必要である。それについて、まず注意されるのは、**ハヒフヘホ**の仮名である。現代文でも、助詞の「は」や「へ」は、こう書いてワ・エと読むが、古文では、そればかりでなく、

かは（川）　こひ（恋）　食ふ　いへ（家）　おほかた

というように、**語中・語尾にある「は」「ひ」「ふ」「へ」「ほ」は、ワ・イ・ウ・エ・オと読むのが原則**である。これらは、もともとはそのかなの通り発音されたものである。（といっても、それは両くちびるを突き出すようにして、ファ・フィ・フゥ・フェ・フォというように発音されたと言われている。）それが、後世ワ・イ・ウ・エ・オのように発音されることになったのだが、かなはもとのままに書いているということなのである。それで、現代語ではワ・ア行五段活用（ワイウエ活用）の「思う」「言う」などは、古文では「思ふ」「言ふ」で、ハ行四段（ハ・ヒ・フ・ヘ）活用となるが、読むのには現代語と同じような発音になるのである。

上の原則にはずれるものとして「はなはだ」「あふる」「行かまほし」などがある。また、語の最初に「は」「ひ」「ふ」「へ」「ほ」を持つ語が、複合語の下の成分となっている場合は、その「は」「ひ」「ふ」「へ」「ほ」をワ・イ・ウ・エ・オと読まない場合が多い。

はつはる（初春）　かぐやひめ（かぐや姫）　をりふし（折節）
なかへだて（中隔）　かりほ（刈り穂）

これには、次のような四つの法則がある。

(1) **アウ　が　オー　となる。**（au→o）

会ふ → オー　　かう→ コー　　たまふ → タモー

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あふみ（近江）→ オーミ

(2) **イウ　が　ユー　となる。（iu→yu）**

言ふ → ユー　　久しう → ヒサシュー

(3) **ウ　が　ヨー　となる。（eu→yo）**

えう（要）→ ヨー　　てうづ（手水）→ チョーズ
てふ（蝶）→ チョー

(4) **ウ　が　オー　となる。（ou→o）**

おうな（老女）→ オーナ　　こうぢ（小路）→ コージ

この法則は、ローマ字で書いてみると、わかりやすい。上の例にもあるように、この法則をあてはめるとき、ウと読むはずの「ふ」がある場合は、まずそれをウにしてから考えなければならない。

上の法則にはずれるものとして、次のようなものがある。

たふる（倒る）　　あふひ（葵）　　あやふし（危ふし）
あふぐ（仰ぐ）　　あふぎ（扇）

これらが、タオル・アオイ・アヤウシ・アオグ・オーギと発音されるのは、アウがオーとなりきる前の発音が残ったものだろうと考えられている。

◇ 次の諸語は、古典語の場合と現代語の場合と、読み方が違う。

買う一買ふ（コー）　　洗う一洗ふ（アロー）
舞う一舞ふ（モー）　　習う一習ふ（ナロー）

古典語では、また、「い・ゐ」「え・ゑ」「お・を」のかなが区別されている。これらも、もとはそれぞれ発音の区別があったのであるが、後世区別がなくなったのである。助詞や助動詞の「む」は「ン」と発音する。助詞の場合に「を」を用いるのは、古典かなづかいの名残である。

現在日本で日常使われている言葉を「**口語（口語文）**」と言い、主に江戸時

代まで文章として使われた言葉を「**文語（文語文）**」と言う。

これから学習する「古文」は、「**歴史的仮名遣い**」と呼ばれる表記によって書かれていて、平安時代中期にできた形が基本になっている。

「かな」は、もと「かりな」であり、その変化した形「かんな」から転じたものである。漢字では「仮字・仮名」と書いた。「な」は文字の意味であり、かりの文字という意味である。

「かな」は漢字と別なものと意識されているが、そもそも「ひらがな」は漢字の省略形から成ったものである。発生時の「かな」は、字体は漢字のままであった。字体は漢字のままでも、本来の表語文字として用いず、その表意性を無視して表音性のみを借用したものを、かりの文字という意味で「かりな」と称したのである。本来の表語文字として用いる漢字を「まな（真字・真名）」というのに対する称呼であった。奈良時代の万葉集などには、漢字の字体のままの「かな」が使われており、それを「万葉がな」と呼ぶ。

五十音図（文語）

段／行	ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段
ア行	あ	い	う	え	お
カ行	か	き	く	け	こ
サ行	さ	し	す	せ	そ
タ行	た	ち	つ	て	と
ナ行	な	に	ぬ	ね	の
ハ行	は	ひ	ふ	へ	ほ
マ行	ま	み	む	め	も
ヤ行					
ラ行	ら	り	る	れ	ろ
ワ行					

いろは歌

A　いろはにほへと　ちりぬるを　わかよたれそ　つねならむ
　　うゐのおくやま　けふこえて　あさきゆめみし　ゑひもせす

B　イロワニオエド　チリヌルヲ　ワガヨタレゾ　ツネナラン
　　ウイノオクヤマ　キョウコエテ　アサキユメミジ　エイモセズ

C　色(いろ)は匂(にほ)へど　散(ち)りぬるを　わが世(よ)誰(たれ)ぞ　常(つね)ならむ
　　有為(うゐ)の奥山(おくやま)　今日越(けふこ)えて　浅(あさ)き　夢見(ゆめみ)じ　酔(ゑ)ひもせず

A のいろは歌を音読み通りに書いたものが B、意味を考えて漢字仮名交じりで書いたものが C である。

◆いろは歌の意味◆

「いろは歌」は、平安時代に作られた歌謡である。「かな」四十七字をすべて一回ずつ使って、「世のはかなさ」という思想を歌っている。

現代語訳

桜の花の色は美しく輝くけれど、はかなく散ってしまう。同じように我々の世も、だれがいつまでも変わらないことがあろうか。いつも変わる無常の世の奥山を今日越えて行くような人生で、浅い夢を見るように目の前のことにまどわされまい。酒に酔うようにわけもわからず生涯をおくることもないようにしよう。

練習一

[1] いろは歌のＡとＢで濁音以外で仮名遣いが異なっている部分を抜き出しなさい。

例　[は→ワ]　[　→　]　[　→　]　[　→　]

[　→　]　[　→　]　[　→　]　[　→　]

[2] 前の五十音図のヤ行・ワ行を完成させなさい。

[3] 傍線部に注意して、次の文を音読する通りに片仮名で書いてみなさい。

① 今は　昔　竹取りの　翁と　いふ　もの　ありけり。
② 野山に　まじりて　竹を　取りつつ　よろづの　ことに　使ひけり。
③ 名をば　さかきの　造となむ　いひける。
④ その　竹の　中に　もと　光る　竹なむ　ひとすぢ　ありけり。
⑤ あやしがりて　寄りて　見るに　筒の　中　光りたり。
⑥ それを　見れば、三寸ばかりなる　人　いと　うつくしうて　ゐたり。

『竹取物語』

現代語訳

① 今となっては昔のことだが、竹取りの翁という人がいたそうだ。
② 野山に分け入って竹を取っては、いろいろなものを作るのに使っていたそうだ。
③ （おじいさんの）名前はさかきの造といった。
④ （おじいさんが取っている）その竹の中に、（なんと）根元が光っている竹が一本あった。
⑤ 不思議に思って近寄って見ると、筒の中が光っている。
⑥ その竹筒の中を見てみると、三寸ぐらいの人が、とてもかわいらしい姿で座っている。

第二節　古文の言葉の単位

文	つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、……、 あやしうこそものぐるほしけれ。
文節	つれづれなる/ままに/日暮らし/硯に/むかひて/……/ あやしうこそ/ものぐるほしけれ。
単語	つれづれなる/まま/に/日暮らし/硯/に/むかひ/て/……/ あやしう/こそ/ものぐるほしけれ。

文章と文

文は、一つのまとまった思想や感情が書き表れ、完結している言葉であり、表記の上ではその終わりに句点「。」がつけられる。このような文が一つまたはそれ以上集まって構成されたものが、**文章**である。

上の『徒然草』序段には、五つの読点「、」が付されており、句点は〈ものぐるほしけれ〉の最後一つだけである。この序段は一つの文がそのまま一つの文章になっていることになる。

文　節　一つのまとまりをなす単位

文章を構成している文は、幾つかの文節から成り立っている。

つれづれなるままに　→　つれづれなる/ままに　〈二文節〉

日暮らし硯にむかひて　→　日暮らし/硯に/むかひて　〈三文節〉

文節とは、意味をこわさない程度に、文を小さく区切ったものであり、発音や意味の上で一つのまとまりをなす単位である。

単　語　最小の単位

文節をさらに分けた、ことばとしての最小の単位が**単語**である。

つれづれなる/ままに　→　つれづれなる/まま/に

日暮らし/硯に/むかひて　→　日暮らし/硯/に/むかひ/て

単語の大別

単語は、それだけで文節になることができるものと、できないものとに大別される。

(1) **自立語　単独で文節になれる**

<つれづれなる>　<まま>　<日暮らし>　<硯>　<むかひ>は、それだけで一つの事物や動作・状態を表しているとともに、単独で文節になることができる。このような単語を**自立語**という。

(2) **付属語　単独で文節になれない**

一方、〈に〉や〈て〉は、それだけでは意味をなさず、自立語についてはじめて意味がわかるものである。また、それ自体が単独で文節になることはできない。このような単語を**付属語**という。

文章構成図解　　**文章 → 文 → 文節 → 単語** { **付属語**／**自立語**

複合語　（一つの単語として扱う）

〈心にうつりゆく〉の〈うつりゆく〉は、「うつる」と「ゆく」という別々のことばが一つになったものである。このように、二つ以上の言葉が結合してできたものを複合語という。

（夏雲・離れ住む・名高し）など。

こうした複合語の中でも、〈国国〉、〈泣く泣く〉のように同じ語が重なったものを**畳語**（じょうご）という。

（木木・ゆくゆく・たまたま）など。

なお、〈お姫さま〉は〈姫〉という語を中心に、〈お〉と〈さま〉がついたものである。また、〈若やぐ〉は〈若し〉という語に、動作をあらわす〈やぐ〉がついてできたことばである。これらを特に**派生語**ということがある。

（散る→散らふ・高し→気高し）など。

◇ 文を文節に区切ること

- 山路を/登りながら/こう/考えた。
- 山路を/登りつつ/かく/考へつ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com